

ワッタース朝スルターン＝アブー・ハッスーンの廃位について

篠田 知 暁

始 め に

本稿では、現在のモロッコにおおよそ対応する地域（歴史的にマグリブ・アクサーと呼ばれる）を、その北部を中心に支配した王朝である、ワッタース朝¹⁾ (ca. 1471–1554) 政治史について論じる。この王朝は、それほど研究者たちの関心の対象とはなっていないが²⁾、前代のマリーン朝と同じく、ベルベル人ザナータ族の連帯意識に基づいて成立し、その部族的国家体制の限界が明らかになった時代の王朝と看做されている。その初代ムハンマド・シャイフがフェスに入城して新王朝を創始した時期、マグリブ・アクサーの沿岸に位置する

1) 本稿では通例に従い、ベルベル人ザナータ族の一派マリーン族に属し、12世紀末この集団の指導的地位についた、アブド・アルハック家の王朝をマリーン朝と呼び、その傍系であるワッタース家の王朝をワッタース朝と呼ぶ。ただし、この変化はマリーン族内部での王統の移行に過ぎないため、同時代の史料では両王朝ともマリーン朝と呼ばれうることに注意する必要がある。なお16世紀前半、グレゴリウス暦はまだ制定されておらず、西暦にはユリウス暦が使用されている。そこで本稿では、ヒジュラ暦の日付を西暦に変換する場合はユリウス暦を用い、そのまま表記するときは〇〇〇H年と記す。また、マグリブ・アクサー北部の、フェスを中心にしたウンム・アッラビー川以北の地域を、便宜的にフェス王国と呼ぶ。

日本の学界では、ワッタース朝の時代について殆ど紹介がなされていないので、本稿末尾に関連年表を付した。また、ワッタース朝期マグリブ・アクサーの地図（図1）を付した。そして、事件の関係者に同名の人物が多数存在し、非常に紛らわしいので、フェス王国北部の有力者たちの関係を図2にまとめた。参考になれば幸いである。

2) この地域に関する代表的な通史、概説書から、この王朝に対する評価を挙げておこう。まず植民地時代の研究を総括する内容である Terrasse 1949 は、この王朝は「新しいものも活性化させるものも全くもたらさず、……国土の僅かな部分しかその直接的で実効的な権威の下におかず、ほぼ完全に無力であることを運命付けられていた [2: 138]」とし、その権力は絶えず衰退し続けたと結論付ける [2: 156]。Julien 1951: 569 によれば、「ワッタース朝はそれ自体としては大して重要ではない。その君主たちは、マリーン朝の政策を全く変更せず継続しただけだった」。そして Abun-Nasr 1987 は、ワッタース朝に独立した章や節を割いておらず、シャド朝の台頭に関する記述の中に組み込んでいる [206–212]。これらの記述は何れも、後述する Cour 1920 の記述を修正したり補うというより、むしろ要約しながら問題を増大させているように思われる。近年発表された Abitbol 2009: 136–174 では、ワッタース朝の歴史はマリーン朝と同じ章で（一部はシャド朝の章の中で）、過渡期として述べられている。とはいえ、上記の著作に比べればだいぶ詳細な内容であるが、おそらく信頼のできる専門論文があまりに乏しいためであろう、多くの誤りを含んでいる。日本語で読めるものとしては、佐藤 2002: 388–390 を参照。

港湾都市の多くは、ポルトガルによって次々と占領されていった。しかし王朝はこれに有効な手を打てず、人々は新たな指導者を待望していたとされる。これまで研究者たちの多くは、この新たな指導者、つまりワッターズ朝を滅ぼしてこの地域の政治的統一に成功した、サード家の人々による王朝（いわゆるサード朝）の側を中心に議論してきた。そして、その台頭をある種の宗教運動と看做してきた。というのは、当時のマグリブ・アクサーでは、マリーン朝の宗教政策の結果、政治的支配権行使正当化の根拠を、正統なシャリーフ、つまりイスラームの預言者ムハンマドの子孫であることに求める潮流があった。また、当時この地域で多くの支持者を獲得していたスーフィー教団シャーズィリーヤの支教団ジャズリーヤは、預言者への崇敬をその特徴としていた。そして、シャリーフであるサード家の人々とジャズリーヤのシャイフ（師匠）たちが、異教徒ポルトガル人へのジハードを遂行するため協力したことが、サード朝家の人々による支配権獲得の背景にあると考えられたのである。ただし、近年の研究では、彼らの成功に関して、ジハード以外の要因が強調される傾向にあり、より多面的で詳細な研究が発表されている³⁾。

その一方でワッターズ朝に関しては、多くの研究が Cour 1920 に未だ依拠している。これは、著者が4頁で述べているように、1884/5年エジプトで出版された、ナースィリーのマグリブ・アクサー通史 *Kitāb al-istiṣṣā* をもとに、様々な史料で情報を確認、修正した研究である。しかし、ワッターズ朝滅亡より3世紀以上経て書かれたこの歴史書は、19世紀スペインで書かれた研究書を史料にするなど [Lévi-Provençal 1922: 364–366]、もともと王朝史の一次史料として扱うには非常に問題がある。しかもクールは、時代的な制約から重要な書簡史料や年代記を利用しておらず、さらに遺漏や誤解も多い。その結果、本来綿密な考察をすべき幾つかの問題が、重大な誤りを抱えたまま放置されている。

前置きが長くなったが、本稿で取り上げる、ワッターズ朝第3代スルターン＝アブー・ハッスーンの廃位もその一つである。クールの簡潔な説明では、1525年王朝第2代スルターン＝ブルトゥガーリーが死去すると、協定によって兄弟のアブー・ハッスーンが即位した。そして1526年9月末ブルトゥガーリーの息子であるアフマドがアブー・ハッスーンの地位を奪い、フェスの法学者全員から承認を受けて正式に即位したとされる [Cour 1920: 154]。

3) 上述のように、この時期のマグリブ・アクサーの政治史は、ポルトガルに対するジハードという観点からサード家の支配権獲得を説明することを主眼とし、それはしばしば20世紀フランスによる植民地支配からの解放と重ね合わせて理解されてきた。García-Arenal 1990: 78–79 はこれを、「最も習慣的な『既製品』の解釈」と呼んで批判している。さらにクックは、同時代の書簡史料と叙述史料をもとに、16世紀以降ワッターズ朝がその軍事技術発展によって、ポルトガルが支配する都市や地域へ攻勢に転じていたのに対し、サード朝の側は、1541年のサンタ・クルス（現在のアガディール）占領まで、格別戦果を挙げていないとさえ主張している [Cook 1994: 167]。ただしこの見解は、やや誇張があるように思われる。

このアブー・ハッスーンは、クールの説では、1540年代のワッタース朝とサアド朝の抗争の際に登場し、アフマドを補佐して活躍するバーデイスの支配者アブー・ハッスーンと同一人物とされる。そしてこの人物は、1549年サアド朝がフェスを占領すると外国に亡命し、1554年オスマン朝の支援を得てフェスを奪回し復位したが、同年サアド朝との会戦で戦死したとされる [Cour 1920: 178; 188]。しかしこの両者を同一人物と看做す証拠は特に示されておらず、また廃位の経緯については触れていない。

これまで、この廃位事件について殆どの研究者は関心を払っていない。僅かにリカールが、後述するようにその首謀者だったと思われるラーシド家のイブラーヒームの評伝で、ポルトガル語年代記 AA に見られる、上述の説と矛盾した記述を紹介している。しかし、クールの権威によってそれを誤りとする [Ricard 1941: 310, n. 2]。

本稿は、この事件の関係者たちがどのような人物で、それがどのように展開したのか明らかにし、クールの説を再検討することを目的とする。そして、ワッタース朝史においておそらく衰退への転換点に位置づけられるこの事件を引き起こした、王朝の内部対立にも考察を

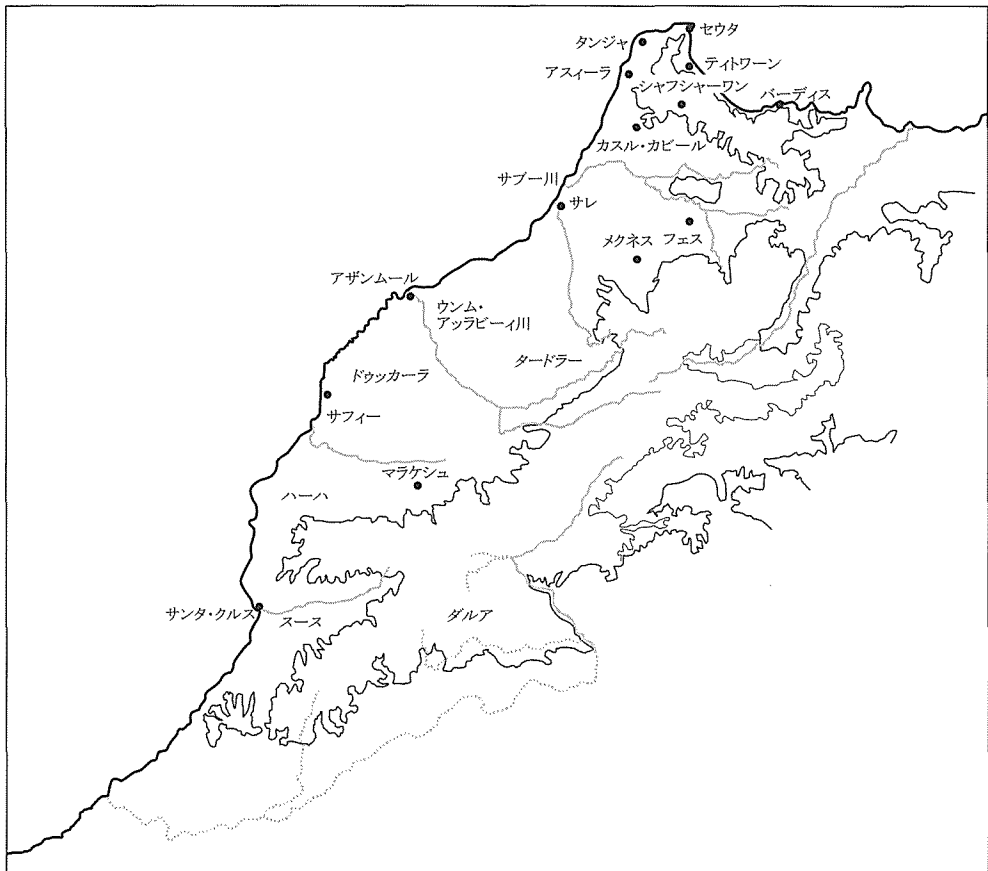


図1 マグリブ・アクサー（16世紀前半）

加えたい。

本稿の議論の性質上、本題に入る前に、主要な史料の特徴や相互の関係についても説明を加えておく必要があるだろう。ここではまず書簡史料、次いでアラビア語とポルトガル語の叙述史料の順に紹介しよう。

書簡史料

冒頭で述べたように、15世紀後半以降ポルトガルはマグリブ・アクサー沿岸部の多くの都市を支配していた。そのためそれらの司令官や下僚、本国の国王や役人、ポルトガルに臣従する現地の部族や都市の有力者、ワッターズ朝やサアド朝の要人らが交わしたポルトガル語とアラビア語の書簡が、文書館に相当数存在し、非常に重要な史料となっている。これらは、幾度か部分的に公刊されてきたが、SIHM Portugal 1-5に、要約、注、索引付きでまとめて収録された。ただしその多くは、ポルトガルが支配する都市やその属域の状況に関する報告や、本国への要請に関するものであり、情報の内容には偏りがある。

アラビア語叙述史料

ワッターズ朝期マグリブ・アクサーは、同時代人によるアラビア語の歴史記述に乏しい。本稿が特に依拠した歴史家は、下記の2人である。この他、ワッターズ朝前半に執筆された歴史書としては、アフマド・ワンシャリースーの物故録やイブン・ガーズイーのメクネス史が挙げられるが、前者は1508年、後者は1513年に没してしまう⁴⁾。そして、サアド朝の基本史料である17世紀中葉のタグマッダールト匿名年代記の著者は、サアド家の最初期から950 H年代までの期間について、時に述べていない。そのため、この史料を利用して18世紀初頭執筆されたイフラーニーのNHも、この間の出来事については具体的な記述に乏しく、サアド朝期以降に成立した伝記史料からの引用を幾つか挙げるに留まる。

ムハンマド・クッラーサー (1469/70 - 1557) [‘AM: 5-9 ; Hajji 1976 2 : 472]

1527/28年以降没するまでティトワーンのカーディーだった。‘AMは、950 H年 dū al-hiġġa 月 (= 1544年3月) までのワッターズ朝スルターンたちの歴史を、ラジャズの韻律を用いた412の対句からなる韻文で記述したもの。その規模の小ささや、形式に起因する表現の制約、そして当時のスルターン=アフマドに献呈された作品であることによる内容の偏りといった問題点は指摘できるものの、事件と同時代人による数少ない貴重な史料であることには間違いない。なお管見の限り、後代の歴史家たちはこの作品を利用していない。

4) これらに、アラビア語の史料ではないが、グラナダに生まれワッターズ朝に仕えたレオ・アフリカヌスの『アフリカ誌』を加えることもできよう。しかしこの作品も、著者が1515年ごろ東方へ旅立った後に関しては、いくつか伝聞による情報が加えられているに留まる。

アフマド・イブン・アルカーディー (1553–1616) [Lévi-Provençal 1922: 100–112; 247–250; Hajji 1976 2: 421–422; Deverdun: “IBN AL-ḲĀḌĪ”]

フェスの高名な文人の家系に生まれたサード朝期を代表する歴史家の一人で、多数の著作がある。LF は編年史で、700 H 年以降の出来事と物故者について簡潔に記したもの⁵⁾。DH はイブン・ハッリーカーンの物故録の補遺として書かれたもので、マグリブ・アクサー以外の地域の人物も対象としている。この作品については、999 H 年執筆を始め、数年をかけて完成させたと考えられている。ĠI はフェスの都市史であり、最初に町の描写、次いでこの町に縁のある名士を対象にした人名録という構成になっている。また冒頭で著者は、これまでに書いた史書として LF や DH の名前を挙げており [ĠI: 10]、そして 1012 H 年没したサード朝スルターン＝マンスールを存命中としていることから [ĠI: 116]、執筆はこの間と推測される。

ポルトガル語叙述史料

事件当時のポルトガル国王ジョアン 3 世の年代記作家であるフランシスコ・デ・アンドラーデは、1520 年代から 30 年代半ばのマグリブ・アクサーについて、言及していない。代わりに、事件と同時代人である次の著者によるアスィーラの年代記が、重要な情報を伝えている。

ベルナルド・ロドリゲス (ca. 1500–?) [AA 1: VII–XII]

アスィーラで生まれ、1523 年ごろ守備隊に加わった。彼の年代記は、1508–1535 年にアスィーラで起きた出来事を、ワッターズ朝との攻防を中心に詳述している。また、1531–1532 年都市の司令官の命でフェスを訪れていることも、事件の情報提供者としての重要性を高めている。ただし、その執筆がかなり遅く 1561 年ごろと推測されること、そしてアスィーラ放棄 (1549) までの情報が書かれる予定だったが、何らかの理由で未完に終わっており、内容がよく整理され十分推敲された記述とは言いがたい。

I アブー・ハッスーン廃位事件の関係者たち

この章では、廃位事件の関係者たちを、ワッターズ朝王族、ラーシド家を中心にしたフェス王国北部の有力者、そして事件当時マラケシュを占領して王朝から独立の姿勢を明らかにしつつあったサード家のシャリーフという 3 つの集団に区分し、それぞれの特徴を概観する。これらはいずれも、ブルトゥガーリーの治世まで、王朝によって各地の政治的エリートとし

5) イブン・アルカーディーは LF: 324 で、この史料の末尾は 999 H 年の記事で、1000 H 年 raġab 月末脱稿したと述べている。しかし、校訂者が用いた写本 5 点のうち 2 点は 1009 H 年までの記事を含んでいる。校訂者はこの矛盾を解決せず、すべての情報をそのまま採録している。

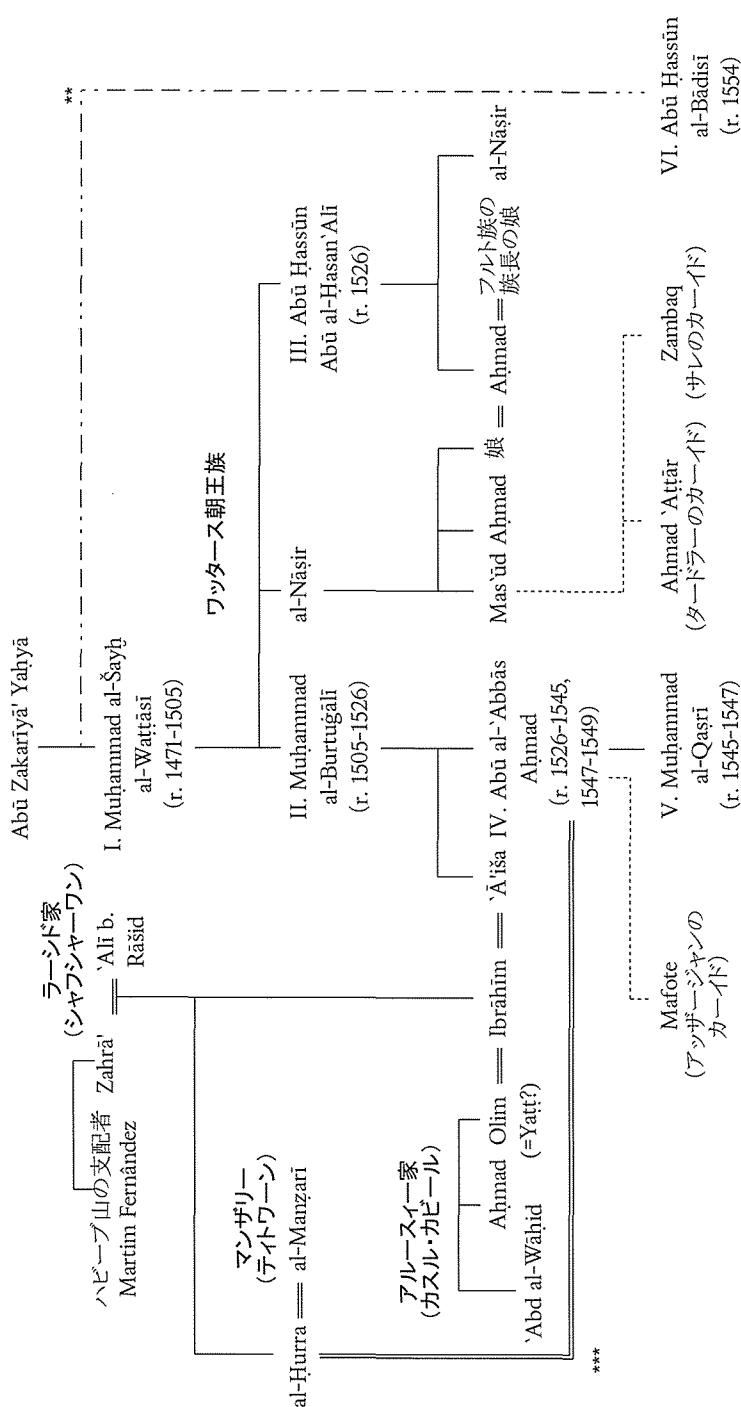


図2 ワッタース朝期フェス王国北部の有力者たち*

*この図では、本稿で言及した人物とワッタース朝スルターンに限り記載した。後者の即位の順番はローマ数字で示した。なお実線は親子、二重線は結婚、点線は主従をそれぞれ意味している。破線については下の注を参照。

**マールモデルは、バーティスの支配者のマンズールとムハンマドが1508年当時のスルターン、つまりブルトゥガリーのいとこ primo であると述べている [DGA 2: 136v.]。しかし彼らとアブ・ハッスーンの関係は明らかではない。

***マンザリー没後の1541年再婚。

ての地位を認められ、王朝の軍事行動に参加していた人々の集団であり、それぞれの利害関心に応じて廃位事件に関与していくことになる。

ワッターズ朝王族

まずアブー・ハッスーンは、管見の限り、1517年のワッターズ朝によるドゥッカーラ地方遠征の際、おそらく6月初めの書簡で、初めて言及されている。この時、アブー・ハッスーン b-ḥ-s-n と呼ばれる人物が、ナースィル n-ṣ-r, ムハンマド・シャリーフ Muḥammad al-Šarif, アブー・バクル b-b-k-r と呼ばれる人物らとともに行動しており、ムハンマド・シャリーフはアザンムール、サフィーに向かったと伝えられている [SIHM, Portugal 2 : 95–97]⁶⁾。これだけでは、このアブー・ハッスーンが何者かわからないが、その後7月29日付の手紙で、フェスの王、つまりワッターズ朝スルターンのカーイド⁷⁾3人がマディーナ Almedyna (地名) にいると伝えられている。次いで8月1日付の書簡では、アブー・ハッスーン Boaçum と呼ばれるフェスの王の兄弟は、数人のカーイドと共にサフィー近郊のマディーナに来ており、フェスの王は彼をマラケシュの支配者にすることを望んでいると噂されている⁸⁾。そして同月5日、10日付の書簡では、上記の情報に加え、アブー・ハッスーンらに続いてスルターン本人が軍を率い、この地方に到来したことが伝えられている [SIHM, Portugal 2 : 124; 142–143; 146; 148]⁹⁾。ただしこの年の遠征では、大規模な戦闘は起こらず、ブルトゥガーリーは9月頃「この地を平和にして立ち去った」。そして、マラケシュ門内の支配権は、当時支配者であったヒンタータ族のアミール＝ナースィル・ブーシャントゥーフ¹⁰⁾の没後、「フェスの家に」戻ることが決定した [SIHM, Portugal 2 : 172]。これ

6) この書簡では、長母音を示す文字や弁別点が殆ど書かれていないため、推定される読みをカタカナで表記した。

7) ワッターズ朝期の称号について、綴りに異形はあるが、概ね同時代のポルトガル語やカスティーリャ語の史料は、ムスリムの指揮官や都市の支配者を *alcaide* と呼んでいる。本稿ではこの言葉をそのままカーイドと置き換えて訳した。ただしこれは、問題の人物が *qā'id* という地位を正式に保持していたということを保証するものではなく、むしろ軍隊の指揮官とか、現代ポルトガル語に残っている「城主」、「領主」といった意味で、曖昧に用いられていることに注意する必要がある。なお、クラーサーの記述でも、'AM 16; 29; 31; 33; 40 に *qā'id* の用例が見られる。これらはいずれも軍隊の指揮官というほどの意味である。

8) この書簡によれば、フェスの王の兵は、「彼のアラブたち全てとの習慣によって」、王の夕食に供するためテント集落全てで徴税を行った。これはドゥッカーラ地方の住民をワッターズ朝の支配下に置く意思を、儀礼的に示したものとえよう。

9) これら4点は、いずれも、サフィーの司令官ヌーノ・マスカレニャスが、ポルトガル国王マヌエル1世に送ったものである。

10) マリーネ朝スルターン＝アブー・イナーン没後の14世紀後半、マグリブ・アクサー南部は、王朝の権威喪失と共に次第にその直接的な支配から離れていった。マラケシュは名目上王朝の支配下に置かれていたものの、実質的にはアトラス山脈を本拠とする「ヒンタータ族のアミール」と呼ばれる一族の支配に委ねられていた [Cenival 1937]。

らの情報から、アブー・ハッスーンは、スルターンの遠征に参加してその先遣部隊を任され、また将来のマラケシュの支配者と目される、有力なカーイドの1人だったと考えられる。

ただし、当時のワッターズ朝で最大の有力者だったのは、ブルトゥガーリーのもう1人の兄弟であり、上述の書簡にも現れるナースィルである。彼は、ブルトゥガーリーの治世初期になされたメクネスの支配回復や [AA 1 : 9]¹¹⁾、1515年のポルトガルに対するマムラでの勝利の立て役者であり、マグリブ・アクサー南部への遠征の指揮官であった¹²⁾。そしてメクネス、タードラー、サレの支配者としてフェス王国南部を統括し、ブルトゥガーリーの後継者とされていたが、1526年4月半ばに死去してしまう。そこでブルトゥガーリーは、ナースィルの息子のマスウードにその父の土地を与えた。そしてサレとタードラーのカーイドらと呼ばひ、マスウードを主人として por senhor 認めさせた [AA 1 : 460-463]。ベルナルド・ロドリゲスは彼のことを、王国の半分の領主 senhor d'ametade do reino と呼んでいる [AA 2 : 72]。ただし後継者の地位は、この時アブー・ハッスーンに移ったものと思われる。

最後に、ブルトゥガーリーの息子のアフマドについては、その即位以前の情報に乏しい。ただ、1549年頃、ROSX: 177では55歳、GI: 114では約60歳だったとされていることから、事件当時既に壮年期に達していたようだ。また、後述するようにサード家のシャリーフがマラケシュを占領したとき、AA 1 : 380によれば、フェスの王のアフマド Hamete がマラケシュへの遠征を行うとの噂が広まったが、フェスの王もその息子のムハンマド Mafamede も、ムスリム同士で戦うより、むしろアスィーラを攻撃すべきだと考えたという。しかし後述するように、当時のフェスの王はブルトゥガーリー（名前はムハンマド）である。おそらく、父と息子を混同したのだろう。

ラーシド家とフェス王国北部の有力者たち

次いで、事件に直接関係する重要な集団として、シャフシャーワンを本拠とするイドリース家のシャリーフ、ラーシド家を中心とした、フェス王国北部の有力者たちが挙げられる。この一族のアリー・ブン・ラーシドと呼ばれる人物は、15世紀ワッターズ朝成立とほぼ同時期、ポルトガルとその支配下にある部族民らに対する聖戦を指揮し、ワッターズ朝の支援を受けてこの地方で指導的な地位に就いた。そして1494年ごろ、彼は王朝に対して反乱を起こし、独立の姿勢を露わにしたが、スルターンの攻撃を受けて降伏し、許された¹³⁾。

11) ただし、この時期のワッターズ朝によるフェス王国南部支配の回復については、まとまった研究はなされておらず、本稿のように、別の事件について述べる際に指摘されるに留まっている。

12) マムラの戦いについては Cook 1994: 148-149; 153-154 を参照。ドゥッカーラ地方への遠征については、Büşarb 1984: 379-389; Rosenberger 1993 を参照。

13) この地域のシャリーフは、ハサン・シャーズィリーの師として知られるアブド・アッサラーム・ブン・マシーシュの子孫とされ、アラム山のシャリーフと呼ばれる。ラーシド家はその一派

事件当時この一族の指導者は、アリーの息子のイブラーヒームだった。そして、アリーの妻の兄弟で、ベヘル・デ・ラ・フロンテラ出身の改宗者とされるマルティン・フェルナンデスがシャフシャーワンの西のハビーブ山を統治していた。また当時のティトワーンは、1437年破壊された後、マンザリーと呼ばれる人物を中心にしたグラナダ王国からの亡命者によって再建されていた。彼はその再建時からラーシド家と友好的な関係にあり、イブラーヒームの姉妹でサイイダ・フッラと呼ばれる女性と結婚した。そして既に高齢であったため、イブラーヒームらがこの都市の統治に関与していた¹⁴⁾。またイブラーヒーム自身は、カスル・カビールのカーイドの姉妹でアルूसィー家の女性である Olim¹⁵⁾ を妻にしていた。このようにラーシド家は、結婚によってこの地域の有力者たちと同盟関係を築き、その中心的な地位を占めていた。また改宗者や、ナスル朝滅亡によってフェス王国に逃れてきた亡命者らを吸収し、その影響力を強めていた。ただしイブラーヒームは、1517年、1519年、1520年、1522年、1524年ポルトガルの支配下にある北部の港湾都市に対するワッター朝の遠征に参加しており、少なくとも表面的には、王朝に服従する形で自身の勢力を拡大していたように思われる¹⁶⁾。

サード家

これに対して、事件に関わるもう一つの重要な集団である、ダルア地方のシャリーフ、サード家の人々は、その草莽期においてはワッター朝に対してラーシド家と類似した立場にあったが、次第に別の道を取るようになった。

この一族の政治的組織としての初代であるムハンマド・カーイムは、1510年より前にスース地方のタールーダント Taludamte に移り、息子の一人をスースの王 *rey de Sus* と呼ばせてフェスの王の大法官 *yustyça maor* にし、その16歳の弟にはスースの王国 *reyno de Çuz* を与えたことが知られている [SIHM, Portugal 1 : 256]。これは、前者がサード朝初代となるアフマド・アッラジュ、後者が後に兄の地位を奪う弟のムハンマドと推定されるが、Sus と Çuz の違いははっきりしない。この情報はタールーダントの匿名氏

↙ である。彼らの歴史は al-Āfiya 1982 に詳しいが、しばしば典拠が明瞭でないほか、やや観念的な解釈が目立つ。

14) ワッター朝期のティトワーンについては、Ibn Azzuz Hakim 1957; Latham 1965; Gozalbes Bustos 1988 を参照。

15) このイブラーヒームの妻は、DN: 30 ではヤット・ビント・ムハンマド・アルूसィーとされており、ベルナルド・ロドリゲスが誤解していた可能性がある。なお当時カスル・カビールのカーイドの名前は、この事件の記述では述べられていないが、AA 2:164 よりアフマド・アルूसィー、そして AA 2:19; 53; DN: 38; 74 から、アブド・アルワーヒド・ブン・ムハンマドという兄弟がいたことがわかる。

16) ブルトゥガーリーの治世、イブラーヒームはこの他 1511年、1518年、1523年ポルトガルに対する攻撃を行っている [Ricard 1941: 306-308]。

からの手紙をもとにした、ポルトガル国王宛ての報告書に見られるものであり、リスボンにいたその作成者がよく内容を理解していなかった可能性もある¹⁷⁾。

翌1511年、ムハンマド・カーイムは、サンタ・クルスに対して初めての攻撃を仕掛けるが、大敗を喫した。そしてダルア地方に戻ってしばらくした後、再びスース地方に招かれる¹⁸⁾。またこの頃、彼らはワッターズ朝に対し、彼らをジハードの指揮官として承認し援助を与えるよう繰り返し要請し、武器のほか軍旗や太鼓を与えられていたことが知られている [DGA 1 : 243 v.-244 r.; ROSX : 41-43; TDST : 13]。そして1515年頃、カーイムとアアラジュは、スース地方をムハンマドに任せてハーハ地方に活動の中心を移動し、ジャズーリーヤの開祖ジャズーリーの墓所があるアフーガールを拠点に、この地方の部族民らを組織した。その後ドゥッカーラ地方でのワッターズ朝とポルトガルの抗争を利用する形で勢力を拡大し、さらに1521-1522年マグリブ・アクサーの多くの地域が飢饉と疫病に見舞われると、食料の供出によって人心を掴み、支持者を獲得していった [Dziubiński 1969 : 46-51; Rosenberger & Triki 1973 : 119-146]。

II アブー・ハッスーン廃位の経緯

アブー・ハッスーンの即位は、サアド家のシャリーフらがマラケシュを占領し、ワッターズ朝との関係が緊迫した直後にあたる¹⁹⁾。彼らの行動に対して1525年9月ブルトゥガーリーはマラケシュ遠征を準備するが、結局アアラジュは、ワッターズ朝に対する毎年の税の

17) なお *yustyça maor* に関しては、1530年当時イブラーヒームが王の *justiça maior* であるという用例があり、こちらはワズィールのことだと思われる [AA 2 : 145; 'AM : 30]。しかし1510年ごろアアラジュが王朝内で1530年のイブラーヒームと同格の待遇を受けていたとは考えられず、やはりその実態は不明である。

18) この時期のムハンマド・カーイムらの行動については、正確な日付の確定は困難だが、Dziubiński 1969 : 37-38; 42; García-Arenal 1990 : 91-92; Cook 1994 : 171 の何れも、1511年の敗戦後彼らが一旦ダルア地方に戻ったこと、そして1514年までには再びスース地方に現れたことでは合意している。

19) これ以前にも、ポルトガル国王ジョアン3世は、1523年6-7月のものと推定される書簡で、「シャリーフとフェスの王の戦争 *guerra d'amtre elle (=Xarife) e el rrey de Fez*」に関する詳細の報告を求めている [SIHM, Portugal 2 : 309]。しかしその詳細は不明である。またサアド家のシャリーフによるマラケシュ占領について、'AM : 22-23では1515/16年ワッターズ朝のハーハ地方遠征の際任命されたように述べ、LF : 288は、1520年彼らがマラケシュに入ったとだけ記すなど、アラビア語の史料は情報が一致しない。ただ、上述したマラケシュの支配者ナースィル・ブーシャントゥーフが、ダルア地方の支配を巡って彼らと争った後、1524-1525年の間にアアラジュを招いたこと、同時期に弟のムハンマドがスース地方から多くの兵を動員してマラケシュ近郊に来たこと [SIHM, Portugal 2 : 335-336]、そしてその後ナースィル・ブーシャントゥーフがアアラジュらに殺害されたことは確からしい [DGA 1 : 245 v.; ROSX : 90]。本稿では、マラケシュ占領以降のサアド家の人々をサアド朝と呼ぶ。

支払いと引き換えに、マラケシュの支配を承認された[SIHM, Portugal 2 : 345; DGA 1 : 246 r.;

ROSX: 98]。この措置について、上述のように AA 1 : 380 では、ワッター朝のスルターンと息子がムスリム同士での戦いを避けようとしたためとされている。しかしこの史料の同じ頁では、当時のフェス王国が疫病と飢饉で疲弊していたことが述べられており、大規模な遠征は困難だった可能性も考慮すべきだろう。そして 1526 年、ナースィルとブルトゥガーリーが相次いで死去したため、両者の兄弟であるアブー・ハッスーンが即位した。

以下、彼の即位から廃位に至るまでの経緯を史料ごとに検討していきたい。まずクッラーシーは次のように述べて廃位の原因を彼の個人的な欠陥に帰着させ、その正当性を主張している。

僅か数ヶ月〔スルターンの地位に〕留まったが、僅かな権威しか持たなかった
彼はその財産を惜しんだ。その一族で他の者には決して無かったことだ
財産は、彼をあらゆる制約から解放している、もしくは彼を保護するもののためにある
と考えた²⁰⁾

ところがその後、言行正しき人々 ulū al-sadād の証言と合意によって廃位された
廃位された支配者全ての約束事に倣って獄死した

貧窮の内に死んだ、財産を手放して。これが至高なる我らの主の裁き [‘AM: 27]

このように著者は、アブー・ハッスーンの獄死を明言している。ところが、‘AM: 41–42 では、アフマドの治世にバーディスの支配者アブー・ハッスーンが反乱を起こし、その後和解したと述べている。よって著者は、両者が別人だと考えていたはずである。ただし、この史料は上述のようにアフマドに献呈されたものであり、この記述が公平なものだとは考え難い。

また、16 世紀後半のジャンナービーによれば²¹⁾、アブー・ハッスーンは飲酒と遊興に耽っていたため、即位から 7 ヶ月後人々はアフマドに訴えかけた。そこでアフマドが歩兵を率いて町に侵入すると、アブー・ハッスーンは抵抗を諦めて退位し、旧フェス²²⁾のターリア街区の屋敷に引退した。しかし 2 ヶ月後、アフマドはアブー・ハッスーンの身柄を拘束、監

20) wa ẓanna ‘anna l-māla qad yunġi-hi min kulli ḍiqin aw li-mā yulġi-hi. 前句末尾の yunġi-hi と後句末尾の yulġi-u-hū で脚韻を踏むため、後者のハムザとヤーが交替している。なお、この箇所は、軍備への支出について述べていると考えられる。

21) 一時アレppoのカーディーを務め、1590 年没した [Rosenthal: “Djannābi”]。彼の年代記は、本稿ではファニャンの伝語訳の解題に従って *al-Baḥr al-zaḥḥār wa-al-‘aylam al-ṭayyār* という題名を採用したが、この著者の年代記として一般に知られているものは *al-Aylam al-ẓāhir fī aḥwāl al-awā’il wa-al-awāḥir* である。この両者の関係については調査が及ばなかった。

22) フェスの町は、8 世紀末建設された旧フェスと、13 世紀行政都市として建設された新フェスという、別々の城壁を持つ 2 つの隔たった町によって構成される [Le Tourneau: “Fās”]。

禁し、溺死させた。なお、この話の情報提供者は、その引退した屋敷に住んでいた人物であるという [BZ: 335]。

この2人の著者に比べて、イブン・アルカーディーの記述は非常に簡潔である。しかも、LF: 291では、ブルトゥガーリーの死を932 H年 rabi' I月23日 (1526年1月7日)、アブー・ハッスーンの廃位をdū al-ḥiġġa月22日 (1526年9月29日) とするが、DH: 209では廃位を931 H年dū al-ḥiġġa月 (1525年10月17日迄) の末、そしてĠI: 212では、ブルトゥガーリーが931 H年没した後、その後継者指名によりアブー・ハッスーンが即位したと述べており、史料間で情報がやや異なる²³⁾。

そして、イフラーニーのサッド朝史では、ワッタース朝のスルターンであるアブー・ハッスーンの治世に関する独立した記事は無く、彼が932 H年即位した後、同年dū al-ḥiġġa月末廃位され、そして後年フェスをサッド朝から奪回して復位したとされている [NH: 73-74]。この記述はイフラーニー以前の史料では見られず、おそらくこれがクルの説の根拠であろう²⁴⁾。つまり2人のアブー・ハッスーンの混同は、イフラーニーの誤解によるもので、それが直接か間接かは不明ながら、クルの研究に取り入れられたと考えられる。また、イフラーニーは、イブン・アルカーディーの何らかの史料を参照し、法学者アブド・アルワーヒド・ワンシャリースィーが、アフマドへのバイア (服従の誓い) を起草したこと、そしてこの書類に他のフェスの法学者たちが署名したことを伝えている [NH: 74-75]。この法学者が、スルターンに対して多大な影響力を持っていたことは、既にCour 1920: 195-197で指摘されている。これはおそらく、彼がアフマドの即位を支持したと関係しているのだろう。

次いでベルナルド・ロドリゲスの記述を検討したい。彼はアブー・ハッスーンの即位について、以下のように述べる。

この頃 [1526年の聖体祭5月29日]、好戦的で戦闘的なフェスの王、ムーレイ²⁵⁾ = ムハンマド Mafamede [・ブルトゥガーリー] が死去した。彼には息子のムーレイ = アフマド Hamete がおり、十分成人して王に適していたが、兄弟たちがその父の所有していたものを相続するため²⁶⁾、王国を兄弟のムーレイ = アブー・ハッスーン Boh-

23) これらの相違は、著者自身の誤りの可能性もあるが、校訂の問題である可能性もある。

24) ナースィリーは、事件当時のマグリブ・アクサーに関する情報を補いながら、イフラーニーの記述を引用している [al-Nāṣirī 4: 369; 379]。ただし上述のとおり、クルは両者を同一人物と看做す根拠を挙げていないので、どちらかを参照したのか、もしくは全く別の史料を用いたのか、不明である。

25) ムーレイとは、「我が主」を意味する mawlā-ya が転訛したもの。ポルトガル語やカスティーリャ語では mulei。現在のモロッコでは、シャリーフに対して用いられる尊称となっている。本稿では引用文中を除き省略した。

26) por erdarem os irmãos o que foi de seu pai. 抽象的な表現で分かりにくいだが、この場合に即して言えば、ブルトゥガーリーが死ぬと、兄弟 (アブー・ハッスーン) が、父 (ムハンマド・ノ

açum に譲った。しかしながら息子のムーレイ＝アフマドを宰相 huzir [＜wazîr], 後継者に指名し、兄弟の死後、王国が彼のものになるようにした。そしてこのことが、多くの不和と争いの原因であり、ムーレイ＝アブー・ハッスーン王の死の原因であった [AA 2 : 28]。

このように、彼の即位には、その没後ブルトゥガーリーの息子アフマドがスルターンの地位を継承するという条件が伴っていた。とはいえ、当時既に 30 代半ばに達していたはずのアフマドが、アブー・ハッスーンより長生きする保証も、後者の子孫がアフマドにスルターンの地位を必ず譲る保証も無かったわけで、その立場はやはり不安定だったといえよう。そして王朝関係者の中には、この取り決めに不満を抱くものがいた。その代表が、著者の説明ではアフマドと親しい関係にあった、ラーシド家のイブラーヒームであった。彼はアフマドの即時の即位を要求し、アブー・ハッスーンを王と認めず、義兄弟であるカスル・カビールのカーイドと連携した。そして疑念を避けるため、アスィーラへの攻撃という名目で合流した [AA 2 : 28-29]。著者はこれらの説明の後、イブラーヒームらの行動を仔細に述べているが、ここでは特に廃位の経緯に絞って見ていきたい。

イブラーヒームは、アスィーラ攻撃で得た捕虜を解放し、ポルトガル王を介してサード朝への使者として派遣し²⁷⁾、アブー・ハッスーンと戦争になった際の同盟を申し出た [AA 2 : 39; 68]。さらに、戦利品の 5 分の 1 をアブー・ハッスーンではなくアフマドに送った [AA 2 : 40]。アブー・ハッスーンはイブラーヒームを服従させようとし、アスィーラとタンジャへの遠征を計画、そして彼の参加を要請した。ただしアブー・ハッスーンは、この遠征で彼との和解に失敗した場合、彼を逮捕する心算だったとされているから、相当の不信感を募らせていたと見られる。しかしイブラーヒームは、この要請に対してさらにアブー・ハッスーンへの挑発を繰り返した。更にアフマドは、軍議で彼への対処を協議した後、彼と合流してしまった。ところがその後、彼らがタンジャで勝利を収め、フェスに凱旋すると伝えられたので、アブー・ハッスーンは喜んでフェスに戻り、歓待の準備をした。しかしこの時、既にアフマドの即位についてイブラーヒームらは合意していた。アフマドは、彼の寵臣でアッザージャン Jazem のカーイドの Mafote を、イブラーヒームの指示に従うよう命令してサブー川の地点に残し、フェスに向かった [AA 2 : 69]。そしてアブー・ハッスーンと会見し、イブラーヒームが翌日フェスでアブー・ハッスーンと会見することになったが、当日後者が会見の準備をしている最中、イブラーヒームは、彼やアフマドの兵とフェスで彼に

↘ シャイフ) の所有していたもの (フェス王国) を息子 (アフマド) より先に継承するということ。ポルトガルの読者に対して、ヨーロッパのような長子相続の原則がないことを説明しているのであろう。

27) 1525 年アアラジュは、サフィー及びアザンムールの指揮官らと和平を締結している [SIHM, Portugal 2 : 348]。

合流した兵、合わせて2000騎を率いてフェスの町に入った。そして、シバー門で詰めていた王宮防衛の責任者であるサキーフアのカーイドに対して、突然アフマドの即位を宣言し、アブー・ハッスーンの屋敷を急襲した。不意を突かれた彼は抵抗できず、ある部屋に監禁され、屋敷も女性たちも全て奪われた [AA 2 : 70]。その後イブラーヒームは外に出て、触れ役らに「アッラーフがムーレイ＝アフマド王を支援しますように！」と叫ばせた。著者によれば、アブー・ハッスーンは非常に善良で温和な人物であったのでとても愛されていたが、誰も逆らえず、アフマドはその日のうちに、新フェスと旧フェスの双方でスルターンの地位を承認された。そしてアブー・ハッスーンは、解放と引き換えに王国を譲ると常に訴えていたが、死ぬまで解放されなかった [AA 2 : 70–71]。

このように、アラビア語の諸史料が事件の詳細な経緯には触れず、原因をアブー・ハッスーンの人格的な問題に還元し、アフマドの即位の正当性を強調する一方で、ベルナルド・ロドリゲスは、イブラーヒーム主導の王位篡奪の過程を詳述している。しかしいずれも、アフマドの即位を望む集団とフェスの住人のクーデターによってアブー・ハッスーンが強制的に退位させられ、その後死亡したことは一致している。そして彼らは、フェスの有力な法学者たちからの承認により、その行動の正当化を図ったのである。

Ⅲ アフマドの治世初期の政治的混乱

前章でアブー・ハッスーン廃位の経緯を明らかにしたが、その死については未だ不明な点が残されている。クッラーシーは、彼が「殺害された」とは述べていないし、ジャンナービーの情報は、伝聞に基づく記述で、確実な証拠とは言えないからである。以下に見ていくように、アフマドは即位後、マスウードとともにマラケシュ遠征を行っており [‘AM : 28–29]、後者が当時の王朝で重要な地位を占めていたことが推測される。そしてアブー・ハッスーンは、この遠征と同時期にきわめて疑わしい状況下で死亡し、その死を巡ってアフマドとマスウードの対立が表面化する。そして前者を支援したイブラーヒームが、マスウードに代わり王朝内で重要な地位を占めることになる。

1 マラケシュ遠征とフェスの反乱

この遠征の原因は、GDA : 246 v.–247 r.; ROSX : 99; 102 によれば、アアラジュが「アフリカの王 *reyes de Affrica*」の称号を名乗り、シャリーフであることを根拠にアフリカ全ての領主権を主張したことである。この称号は1527年3月26日付のアラビア語書簡史料から、ムラービト朝とマリーン朝の君主が称したアミール・アルムスリミーンと推測される²⁸⁾。お

28) マリーン朝君主の称号については、Khaneboubi 2008 : 41–47 をみよ。この称号は、1526年9月24日の書簡ではまだ名乗っていない [SIHM, Portugal 2 : 367–368; 399]。

そらくアアラジュは、イブラーヒームが送った使者の情報からワッタース朝の内紛を知り、これを自らの威信増大の好機と見たのだろう。そしてタードラーのカーイド＝アッタルがアザンムールの新任司令官ガルスィア・デ・メロに送った書簡によれば、遠征は1526年10月28日の時点で既に準備されていた。ところが12月11日付の書簡では、アブー・ハッスーンが逃亡し、その後逮捕されたと伝えられており [SIHM, Portugal 2 : 384–388]²⁹⁾、しばらく遠征に関する情報は途絶える。そして半年後の1527年6月24日、マスウードよりアザンムールに伝えられた情報では、遠征軍はマラケシュを包囲した。しかしその後、フェスで反乱が起きたとの知らせを受けて、アフマドは急遽兵を引き、遠征は失敗に終わった [SIHM, Portugal 2 : 407–411]。

このフェスの反乱については、諸史料の記述に幾つかの相違がある。まず AA 2 : 71–72 によれば、その首謀者は、前王の息子であるアフマド・ブン・アビー・ハッスーンで、アフマドのマラケシュ遠征中、旧フェスの主だった人々と共謀し³⁰⁾、ある金曜日の朝、騎兵100を率いて門から進入し、アブー・ハッスーンが監禁されている塔に向かった。しかし彼はサキーファのカーイドの抵抗を受け、さらに歩兵を率いていた兄弟のナースィルとの連携に失敗したため、父を救出できずに逃亡し、ポルトガルの支配するアザンムールに亡命した。そしてアフマドはフェスに戻るとアブー・ハッスーンを殺害したとされる。ただしこれは、あくまで著者が伝え聞いた話であり、『彼は牢獄で病死した』と言われているが」と断っている。

他方 LF : 291–292 によれば、反乱は934 H 年 ramadān 月16日日曜日起きたとされるが、この日は1528年6月4日で、実際には木曜日にあたる。ただ、933 H 年の同じ日であれば、1527年6月16日日曜日である。これはちょうど、アフマドがマラケシュを包囲した時期であり、依然 AA で挙げられた曜日との相違は残るものの、1527年6月半ばの出来事と見てよいだろう。また、その首謀者らの名前についても相違があり、兵を率いてフェスの町に侵入したのは、スルターンの従兄弟のアフマドとマスウードとされている。その目的は、AA と同じく父親、つまりアブー・ハッスーンの解放である。そして彼らは城代halifa のアフマド・ブン・ナースィルと交戦し、弟のマスウードは逮捕され、アフマド・ブン・アビー・ハッスーンは逃亡したとされる。

この人物の亡命については、ポルトガルの書簡史料で幾度か言及されている。ここでは重要なものだけを挙げると、彼が1529年6月頃本国へ移動した際（後述）、その到着をジョア

29) これはジャンナービーの、アブー・ハッスーンは廃位の2ヵ月後拘束されたという情報と合致する。ここからアブー・ハッスーンは、LF で伝えられているように1526年10月9日廃位、監禁され、その約2ヵ月後逃亡したものの逮捕、再び監禁されたと考えられる。

30) これは、反乱が成功したとき、アフマドらと同じく、フェスの法学者からの承認を得ることを意図していたのではないか。

ン3世に報告する書簡は、「閣下が彼を厚遇し、彼の涙をその目から拭うことを期待」して、彼は訪れたと述べる。そして彼が、かつてメクネスの支配者だったナースィルや、王朝の草莽期以来の支援者であるフルト族のある族長の娘を妻にしており、この族長は騎兵2000を保有し、フェスの多くの土地から彼への支持を獲得していることを伝える [SIHM, Portugal 2 : 473-474]。またその帰国後の1538年フェスを訪れたポルトガルの使者は、自身のことをフェスの王、つまりアフマドは、「そちらにいたムーレイ＝アフマド、つまり殺されたムーレイ＝[アブー・]ハッスーンの息子とその家族、とりわけ今日では彼[アフマド]の非常な寵臣であるムーレイ＝ナースィルから」知ったと述べている [SIHM, Portugal 3 : 169]。

これらの情報を総合すると、アフマドとマスウードによるマラケシュ遠征は、アブー・ハッスーンの2人の息子、アフマドとナースィルらの反乱によって失敗に終わった。そして、遠征軍帰還後アブー・ハッスーンが獄死したため、彼がアフマドの命で殺害されたという噂が広まったと考えられる。

2 マスウードの粛清

前代スルタンの極めて疑わしい状況での死は、アフマドと他の王族たちの関係を緊張させ、特に最有力王族であるマスウードとの対立を顕在化させた。そして、再びアフマドを支援したイブラーヒームが、マスウードの排除と粛清の後、王朝最有力者の地位に就くことになる。

ベルナルド・ロドリゲスはこの対立についても、アフマド即位時にその寵臣として言及されたアッザージャンのカーイド＝Mafoteとイブラーヒームの対立や、前者殺害後のワッタース朝王族たちの不安と絡めて、詳細に記述している。彼の記述を要約すると、まず上述のフェスの反乱とアブー・ハッスーンの死が、マスウードに非常に重く押し掛かった [AA 2 : 72]。また Mafote は、イブラーヒームに保護を求めたキリスト教徒捕虜を殺害したことから、彼と反目していた [AA 2 : 75]。その後アフマドはマスウードを恐れ、イブラーヒームにフェスへ来ることを求めた。後者は最初暗殺を恐れて断ったものの、アフマドが繰り返し要請したため、僅か3人の随員を引き連れてフェスに向かい、アフマドの屋敷に入った。そして2人は、相談の上、マスウードと手紙を交換していた Mafote を殺害し、遺体を晒した。この出来事にフェスの人々は皆驚き恐れ、特に王族たちは、彼らの誰も生き残るまいと思った。そして王の好意を得ようとし、誰もがイブラーヒームのことを話題にした。この知らせを受けたマスウードは、王国中の大砲と弾薬が集められていたメクネスの守りを固め、タードラーやサレのカーイドたちに、アフマドからの攻撃に備えさせた。そして、キリスト教徒の捕虜たちに、アフマドとの戦いで彼を支援し勝利を得たら、彼らを解放するか、人質を返すと約束した。この捕虜は、砲兵やその他専門的な職能を持った将校たちで、マスウードの父ナースィルが、王国中から集めていた人々だった。この約束に彼らは興奮し、マスウードこそフェスの王になるべきだと答え、王に対してしか用いられない言葉で、マス

ワードを称えた。この知らせはすぐフェスに伝わり、アフマドはすぐにメクネスへ兵を向けたが、マスワードはイブラーヒームによって説得され、都市の鍵を持ってアフマドの足下に現れた。そしてアフマドは、マスワードに口付けをすると鍵を返し、フェスに戻った。そしてイブラーヒームはこの和解によって皆から称賛され³¹⁾、アフマドの姉妹のアーイシャと結婚した。一方マスワードは、軽んじられ、王の言いなりである自身の有様を見て、飲酒や悪習に耽るようになった。そしてフェスで逮捕され、キリスト教徒の捕虜によって絞殺されたが、病死であるとの噂が広められたという。そしてイブラーヒームは、直ちに彼の屋敷と地位を手に入れ、フェス王国の半分の領主 *senhor d'ametade do reino de Féz* となり、メクネス、サレ、タードラーの都市と、その属域の土地と遊牧民双方の領主となり、カーイドたちを任命、解任した [AA 2 : 104–107]。

著者のここでの記述には、細部においては、やや物語めいた箇所や誇張と思われる箇所が見られる。とはいえ、Mafote 殺害のくだりからは、彼とマスワードがスルターンに対して他の王族たちを擁護する立場にあったことが窺えるし、メクネスには重火器とそれを操る技術者が重点的に配備されていたこと、そしてイブラーヒームがマスワードに代わって、著者の表現を借りれば「王国の半分」を支配する、王朝の最有力者になったことも確かであろう。

一方クッラシーは、対立の理由については触れていない。そして、以下のようにマスワードの殺害を婉曲に述べ、またアフマドの行為の正当性を強調する。

マスワードが自身への宣伝を行い、メクネスで軍隊を率いて蜂起したとき、

[アフマドは] 全ての人々を、ベルベルやフェスの住人さえ引き連れ行軍して向かった
ワズィールの手を介し、アミールからの約束を得て、彼と和解した³²⁾

彼を伴いフェスに入るや否や投獄し、その後大地に投げ捨てた

敵意によってではなく聖法によって、ある夜指令が下された ['AM: 29]

イブン・アルカーディーも、反乱の理由には特に触れず、マスワードが1529年4月25日曜日に殺害されたと簡潔に述べる [LF: 292]。ところでこの年の6月アフマド・ブン・アビー・ハッスーンがポルトガルに上陸すると、ワッター朝の側で大問題になったことが知られている [SIHM, Portugal 2 : 468–469]。上述のように、彼はマスワードの姉妹といわゆる

31) SIHM, Portugal 2 : 416 の書簡には、1527 年秋既に両者が和解していることが記されている。

32) *ṣālaḥa-hū 'alā yadī l-wazīrī ma'a l-mawāṭiqī minā l-'amirī*. *hu* の長音化は詩における破格語法。校訂者は、ワズィールの箇所に注をつけ、マスワードのことだとしている。確かにクッラシーは、イブラーヒームのワズィール就任をこの事件の後に述べているが、それでは誰が誰と和解したのかわからない。上述の AA での記述から考えても、ワズィールがイブラーヒーム、アミールがマスワードで、マスワードとアフマドが和解したと理解すべきだろう。この対句より 8 行前の 'AM: 28, 第 11 行でも、マスワードはアミールと呼ばれている。amir の用例は 'AM 17; 19; 20; 26; 28; 29; 34; 34; 35; 41 に見られ、これらはいずれもワッター朝の王族を指していると解釈できる。ただし、この短い韻文の年代記の用例だけから、この時代の称号や職名について、一般的な結論を出すのは差し控えたい。

いとこ婚をしており、両者はかなり親密な関係にあったと考えられる。彼がそのマスウードの殺害直後亡命したことは、単なる偶然とは思われない。むしろ両者は内々に連携しており、マスウードの死によって自身の復権が困難になったため亡命したと考えられよう。

このようにしてアフマドは、有力王族であるマスウードやアブー・ハッスーンの息子たちの排除に成功し、王族内で自身の立場を確立することに成功した。そしてイブラーヒームは、最大の功労者であるとともに、スルターンの地位を脅かすことの無い人物として、大きな権力を与えられた。その統治について、ベルナルド・ロドリゲスは、「イブラーヒームは田舎者であり、フェス出身ではないので半ば余所者であり、マリーン族王家の系譜にも属していなかったが、非常に愛され、彼の統治に不平を言うものはいなかった」と述べている [AA 2 : 107]。しかし、実態はより複雑だったと考えられる。何故なら 1530 年行われたマラケシュ遠征では、かつてマスウードに仕えていたカーイド同士の対立や、アフマドへの不信感が表面化し [SIHM, Portugal 2 : 532-533; 540-541], マラケシュ近郊のアンマーイ（現在のスティディ・ラッハール）での和平締結という結果に終わったからである³³⁾。この遠征の前年冬頃アアラジュはカリフの称号であるアミール・アルムウミニーンを名乗っている³⁴⁾。これはサード朝の権力がワッターズ朝の権力より上位にあるという主張に他ならない。しかしワッターズ朝は内部対立から、1527 年の時以上に重大なこの挑発に対して断固とした措置を取れず、失敗を繰り返したのである。この時期に関する研究は未だ不十分であり、さりとてここでそれらを検討していく紙幅はないが、王権が衰退に向かっていく——それは特にサード朝に対する軍事的敗北という形で顕在化する——この時期の政治的動向を考察する上で、イブラーヒームの権力掌握の過程を無視することはできないだろう。

お わ り に —— 事件の総括 ——

度々示したとおり、ワッターズ朝第 3 代スルターン＝アブー・ハッスーンの死は、書簡史料を含む同時代の諸史料に明記されている。このスルターンの復位説は、同名のバーディスの支配者と混同した後世の歴史家イフラーニーの誤解から生まれたものであり、それがワッターズ朝自体への関心の低さから、さしたる批判を受けることもなく通説化したに過ぎない³⁵⁾。

33) この遠征は NH 56 では 1529 年 8 月とされており、Le Tourneau 1953 : 274 はこれに従っているが、誤り。AA : 197-198; 'AM : 30; Cook 1994 : 177-178 も参照。

34) 1529 年 11 月 25 日付の書簡による [SIHM, Portugal 2 : 495]。

35) 当然ながら、ではこれまで同一人物と看做されてきたバーディスの王のアブー・ハッスーンとは何者なのかという問題が、ここで生じるであろう。ワッターズ朝期のバーディスについて本稿で検討する余裕はなかったが、1508 年ヴェネチアとの協定を論じた Wansbrough 1962 や、サード朝によるフェス占領後に関する La Véronne 1978; La Véronne 1979, 港湾都市としての性格

また、アブー・ハッスーン廃位からマスウード肅清までの一連の政争は、各地の有力者やフェスの法学者らを巻き込んだ、王朝内の2つの集団による主導権争いだったように思われる。論者が以前述べたように、ワッターズ朝最初期、スルターンの勢力範囲はフェス周辺に限られていたうえ、フェス王国南部は同じワッターズ家の別の党派が支配しており、彼らと支配権を巡って争わねばならなかった〔篠田 2009: 716-722〕。しかし、スルターンとその近親者たちは、フェス王国北部各地の有力者たちを交渉から武力による威圧まで様々な手段を用いて取り込み、ポルトガルに対する防衛体制を構築していった。ブルトゥガーリーの治世における活発な軍事行動は、この彼らの組織化が結実したものといえよう。その後、このようにして形成されたラーシド家を中心とする北部の集団に対し、フェス王国南部への勢力拡大の結果、その立て役者であるナーシルら有力王族を中心にした南部の集団が形成された。彼らは、更なるマグリブ・アクサー南部への勢力拡大のため、重火器を独占的に与えられていた。また、アブー・ハッスーンがマラケシュの支配者の地位を約束されていたように、この地域の支配回復によってその恩恵に大いに与ることが予想された。その一方で北部の集団は、おそらく人的にも資金的にも負担の大きいポルトガル防衛体制の中に押し込まれたまま、南部への勢力拡大から取り残される可能性があった。

本稿で論じた1526年の廃位事件は、このような状況に不満を持つ北部の集団が、やはり叔父アブー・ハッスーンの即位に不満を持つアフマドを担ぐことで大義名分を得、王朝内でより有利な立場を得ようとしたものと見ることができよう。そしてイブラーヒームは、有力王族たちと彼らの力を削ぎたいスルターンとの対立を利用して、権力の掌握に成功した。しかしこの事件で表面化した王朝の内部対立を収拾することはできず、王朝は次第に求心力を喪失、解体していったと論者は考える。

また、このように既存の王朝の権威と組織を利用して自らの支配を確立したイブラーヒームに対し、フェスから遠くはなれたスース地方を本拠とするサード家の人々は、最初はやはり王朝の権威を借りて自らの地位の強化を試みたものの、その限界を見て、次第に独自の王権確立を模索していく。そしてワッターズ朝の内紛をつく形で、まずアミール・アルムスリミンを名乗り、次いでカリフの称号を名乗ることでワッターズ朝より上位の政治権力であることを主張、対決の姿勢を露わにするとともに、サード朝カリフ制のスタートを切ったのである。

以上の点から、論者は、アブー・ハッスーン廃位事件について、ワッターズ朝政治史の転

↘ を論じた López de Coca Castañer 1993 といった研究があり、いずれもクルルの説に従い、ワッターズ朝第3代スルターンとバーディスの王を同一人物と看做している。なお最後の研究は、1524年アブー・ハッスーンと呼ばれる人物が既にバーディスの支配者だったことを指摘している。現在本稿の論者は、アラビア語史料が皆無に近いこともあり、この町の支配者の王朝内部での位置づけを確定することはできていない。今後の課題としたい。

換点であるとともに、サアド朝、アラウィー朝と続くカリフ制の伝統の起点としても、重要な意味を持つと考える。

関連政治史年表

1415	ポルトガル, セウタ占領
1458	ポルトガル, カスル・サギール占領
1465	フェスの反乱でマリーン朝滅亡, ジューティー家のシャリーフがフェスを支配
1471	ポルトガル, アスィーラとタンジャ占領
ca. 1471	ワッターズ家のムハンマド・シャイフがフェスに入城して即位し, ワッターズ朝を創始
1481	サフィー, ポルトガル王アフォンソ 5 世に臣従 ポルトガル王ジョアン 2 世即位
1486	アザンムール, ポルトガル王ジョアン 2 世に臣従
ca. 1494	ラーシド家のアリーがワッターズ朝に対して反乱, 鎮圧
1495	ポルトガル王マヌエル 1 世即位
1505	ワッターズ朝スルターン=ブルトゥガーリー即位 ポルトガル人ジョアン・ロベス・デ・セケイラがサンタ・クルスの砦を築く
1508	ポルトガル, サフィーを武力で占領
1511	サアド家のムハンマド・カーイムがサンタ・クルスを攻撃するも敗退
1513	マヌエル 1 世がサンタ・クルスの砦を購入 アザンムールを武力で占領
1514	ワッターズ朝, ドゥッカーラ地方に 4 度の遠征 (～ 1518)
1515	ワッターズ朝, マームーラの戦いでポルトガルに勝利
1521	ポルトガル王ジョアン 3 世即位 マグリブ・アクサーで大規模な旱魃, 飢饉, 疫病 (～ 1522)
1524/5	サアド家のアアラジュがマラケシュを占領
1526	ワッターズ朝スルターン=アブー・ハッスーン (1 世) 即位 ワッターズ朝スルターン=アフマド即位 サアド朝スルターン=アアラジュがアミール・アルムスリミーンを称する
1527	ワッターズ朝スルターン=アフマドとマスウードによるマラケシュ遠征 アブー・ハッスーン (1 世) 獄死
1529	マスウード肅清 サアド朝スルターン=アアラジュがアミール・アルムウミニーンを称する
1541	サンタ・クルス, サアド朝ムハンマド・シャイフの攻撃に陥落 ポルトガル, サフィーとアザンムールを放棄
1543	サアド朝ムハンマド・シャイフがアアラジュとの内紛に勝利, 事実上スルターンに即位
1549	サアド朝スルターン=ムハンマド・シャイフがフェスに入城, ワッターズ朝滅亡 ポルトガル, アスィーラとカスル・サギールを放棄 (～ 1550)
1554	アブー・ハッスーン (2 世) がフェスを奪回, ワッターズ朝を再興してスルターンに即位 アブー・ハッスーン (2 世) 戦死, ワッターズ朝完全に滅亡

参 考 文 献

- AA : Rodrigues, Bernardo, *Anais de Arzila : crónica inédita do século XVI*, ed. Lopes, D. 2 vols. Lisboa, 1915 - 1919.
- 'AM : al-Kurrāsī, Muḥammad, *'Arūsāt al-masā'il fīmā li-Banī Waṭṭās min al-faḍā'il*, ed. 'Abd al-Wahhāb b. Maṣṣūr, al-Ribāt, 1963.

- BZ : al-Ġannābī, Muṣṭafā b. Ḥasan, *al-Baḥr al-zahḥār wa-al-ʿaylam al-ṭayyār*. tr. Fagnan, E. In : *Extraits inédits relatifs au Maghreb*, Alger, 1924.
- DGA : Mármol, Luis de, *Descripción general de África*. vol. 1, Granada, 1573 ; vol. 2, Málaga, 1599.
- DĤ : Ibn al-Qāḍī, Aḥmad, *Durrat al-ḥiḡāl fī ġurrat asmāʾ al-riġāl*, ed. Muṣṭafā ʿAbd al-Qādir ʿAṭā, Bayrūt, 2002.
- DN : Ibn ʿAskar, Muḥammad, *Dawḥat al-nāṣir li-maḥāsin man kāna bi-al-Maġrib min mašāʾih al-qarn al-ʿāṣir*, ed. Muḥammad Ḥaġġī, al-Dār al-Bayḡāʾ, 1976 (2003 rep ed).
- ĠI : Ibn al-Qāḍī, Aḥmad, *Ġadwat al-iqtibās fī ġikr man ḥalla min al-aʿlām Madīnat Fās*, 2 vols. al-Ribāṭ, 1973 – 1974.
- LF : Ibn al-Qāḍī, *Luḡat al-farāʾid min lufāḡat ḥuḡaḡ al-fawāʾid*. In : *Alif sana min al-wafayāt fī ṭalāḡat kutub*, ed. Muḥammad Ḥaġġī. al-Ribāṭ, 1976.
- NH : al-Ifrānī, Muḥammad al-Ṣaġīr. *Nuzhat al-ḥādī bi-aḥbār mulūk al-qarn al-ḥādī*. ed. ʿAbd al-Laṭīf al-Ṣādili, al-Dār al-Bayḡāʾ, 1998.
- ROX : Torres, Diego de, *Relacion del origen y suceso de los Xarifes y del estado de los reinos de Marruecos, Fez y Tarudante*, ed. García-Arenal, M., Madrid, 1980.
- SIHM : *Sources inédites de l'histoire du Maroc*. ed. Castries, H. de et al. Paris, 1905 – 1953.
- TDST : *Taʾriḡ al-dawla al-saʿdiyya al-takmaddārtiyya*. ed. ʿAbd al-Raḥīm Binḥadda. Marrākuṣ, 1994.
- Abitbol, M. (2009) *Histoire du Maroc*. Paris.
- Abun-Nasr, J. M. (1987) *A History of the Maghrib in the Islamic period* (1999 rep ed). Cambridge.
- al-ʿĀfiya, ʿA. (1982) *al-Ḥayāt al-siyāsiyya wa-al-iġtimāʾiyya wa-al-fikriyya bi-Ṣafšāwan wa-aḥwāz-hā*. al-Muḥammadiyya.
- Būṣarb, A. (1984) *Dukkāla wa-al-istiʾmār al-burtuġālī ilā sanat iḥlāʾ Asfī wa-Azammūr*. al-Dār al-Bayḡāʾ.
- Cenival, P. de. (1937) Les Émirs des Hintata, “Rois” de Marrakech. *Hespéris* 24, 247 – 257.
- Cook, W. F. (1994) *The Hundred years war for Morocco : gunpowder and the military revolution in the early modern Muslim world*. Boulder.
- Cour, A. (1904) *L'établissement des dynasties des chérifs au Maroc : leur rivalité avec les Turcs de la régence d'Alger 1509–1830*. Paris.
- Deverdun, G. IBN AL-ḲĀḌĪ *EF* 3, 814.
- Dziubiński, A. (1969) Les Chorfa Saadiens dans le Sous et a Marrakech jusqu'en 1525. *Africana Bulletin* 10, 31 – 51.
- García-Arenal, M. (1990) Mahdi, Murābiṭ, Sharif : l'avènement de la dynastie sa'dienne. *SI* 71, 77 – 114.
- Gozalbes Bustos, G. (1988) Sit al Hurra, gobernadora de Tetuán (siglo XVI). In : Perelló, E.

- R. (ed) *Actas del congreso internacional «el Estrecho de Gibraltar», Ceuta, noviembre, 1987*. Madrid, 461 – 479.
- Hajji, M. (1976) *L'activité intellectuelle au Maroc à l'époque sa'dide*. 2 vols. Rabat.
- Ibn Azzuz Hakim, M. (1957) Sitta al Hurra Princesa de Chafchauen. *Cuadernos de la Biblioteca Española de Tetuán* 15, 97 – 115.
- Julien, Ch. -A. (1951) *Histoire de l'Afrique du Nord : Des origines à 1830* (1991 rep ed). Paris.
- Khaneboubi, A. (2008) *Les institutions gouvernementales sous les Mérinides* (1258 – 1465). Paris.
- Latham, J. D. (1965) The Reconstruction and Expansion of Tetuan. In : Makdisi, G. (ed) *Arabic and Islamic Studies in Honor of Hamilton A. R. Gibb*. Leiden, 387 – 408.
- La Véronne, Ch. de. (1978) Politique d'Abu-Hasun, roi de Velez, après la première prise de Fes par les Sa'adiens en 1549. In : Galley, M. (ed) *Actes du Deuxième Congrès International d'Études des Cultures des la Méditerranée Occidentale II*. Alger, 292 – 299.
- La Véronne, Ch. de. (1979) Lettres inédites de partisans de Mūlay Abū Ḥasūn du nord-est marocain (1550). *ROMM* 27, 157 – 170.
- Le Tourneau, R. (1953) Fes et la naissance du pouvoir sa'dien. *Al-Andalus* 18, 271 – 294.
- Le Tourneau, R. FĀS. *EP* 2, 818 – 821.
- Lévi-Provençal, É. (1922) *Historiens des Chorfa : essai sur la littérature historique et biographique au Maroc du XVI^e au XX^e siècle* (2001 rep. ed). Paris.
- López de Coca Castañer, J. E. (1993) Vélez de la Gomera y su puerto durante la primera mitad del siglo XVI. *Historia, instituciones, documentos* 20, 207 – 230.
- al-Nāṣirī, Aḥmad b. Ḥālid. (2001) *Kitāb al-istiṣā li-aḥbār duwal al-Maḡrib al-Aqṣā*. ed. Muḥammad Ḥaḡḡī, 8 vols. al-Dār al-Bayḍā'.
- Ricard, R. (1941) Moulay Ibrahim, Caïd de Chechaouen (circa 1490 – 1539). *Al-Andalus* 6, 299 – 316.
- Rosenberger, B. (1993) Yahya u Tafuṭ (1506 – 1518) : des ambitions déçues. *Hespéris Tamuda* 31, 21 – 60.
- Rosenberger, B. & Triki, H. (1973 – 1974) Famines et épidémies au Maroc aux XVI^e et XVII^e siècles. *Hespéris Tamuda*, 14, 109 – 175 ; 15, 5 – 103.
- Rosenthal, F. AL-DJANNĀBĪ *EP* 2, 452.
- 佐藤次高 (編) (2002) 『西アジア史 I』 山川出版社.
- 篠田知曉 (2009) 十五世紀モロッコ北部における王権と遊牧民部族 『史林』 92 (4), 65 – 92.
- Terrasse, H. (1949) *Histoire du Maroc : des origines à l'établissement du Protectorat français*. 2 vol. Casablanca.
- Wansbrough, J. (1962) A Moroccan Amīr's Commercial Treaty with Venice of the Year 913/1508. *BSOAS* 25, 449 – 471.